印象８編 —2021年4月の総評に代えて

○林　　桂○

・佳作に選んだ編数も、総評に取り上げる編数も減少したが、全体的なレベルの印象は高い。落ちついた投稿情況になっていると考える。また、緩やかに投稿者の入れ替えが進んでいるという印象である。作品も新鮮な感じがする。

●きやま　いと●（兵庫県）
二十年近く前
渾身の詩を
友達に鼻で笑われた傷が
今もしつこく残っている

＊詩を必要としない人はいる。それゆえに、そういう人は詩にも詩人にもリスペクトはない。それどころか、軽侮の対象としていたりする。もちろん「傷」に気づくこともない。

●降旗　沃●（東京都）
誰か宿題を出してくれたらなら
どんなに楽だろう

＊学校生活の中で宿題なんてなければいいと思いながら過ごしてきた。いま、宿

題から解放された生活の中で、するべきことが決められていることの安楽を知る。

●まちりこ●（埼玉県）
母さんは眼を閉じている父といる

＊「眼を閉じている父」が、眠っているのか、亡くなっているのかで、風景は大きく変わる。しかし、「母は」「父といる」という景は不変だ。ひとつシンの通った母の佇まいを感じさせる。

●藤色●（京都府）
おおかみがいなければ
わらの家に住みたかった

＊３匹の子豚。わらの家や木の家に住む子豚は、レンガの家の子豚よりも、準備の悪い怠け者になっている。しかし、これは狼という危険を基準とした目線からのものである。怠け者としてのわらの家ではなく、好みとしてわらの家があっていいはずだ。しかし、狼という危険を想定外にするのではなく、想定内として生活しなければならない現実が、わらの家を否定する。ところで、私達は本当にレンガの家に住んでいるのかどうか。かつて繰りかえされた「想定外」という言葉が蘇る。

●春町　美月●（大阪府）
枇杷の葉の穴を覗く

こどもの眼を見つめる大人
ではなかった父が
見ていた風景

＊必ずしも、育児、家庭生活に心が向いて居いなかった父親。それほど親しみを持てずに成人したのだろうか。では、父は何を見て生きていたのか。その心の風景を考える内面が作者に訪れている。

●風船●（東京都）
最近の兎の切手糊弱い

＊兎の切手は、2円の通常切手。役目は郵便物の額面調整くらいである。糊が本当に弱くなっていることはないだろう。買い置きで劣化しているのかもしれない。それより、最近の記念切手などはシール化されていて、強い接着力を持っている。それに較べると、従来からの目打ちの切手の粘着力は心許なく感じられる。

●風船●（東京都）
ぼくは宇宙生命体という概念を
そもそも疑っている

＊もう５０年も前の生物か地学の授業で、教師は宇宙で生命を探すには水を探すことだと言った。クラス一の秀才Ｉは、水を必要としない生命体だってあるかもしれないと質問した。教師は、水を必要とするものを生命体と定義しているので、そんな生命体はないと答えた。僕らは夢見る少年であったことに気づくとともに、生命体の定義は人知の限りのもので、宇宙的普遍性には根拠を持たないことを知ったのだった。

●翠●（東京都）
花の名を
たくさん知ってる
いじめっ子

＊人の内面、来歴、環境は複雑である。花の名をたくさん知っている子ならば、優しい子だろうと思う。むしろ、時にはいじめにあいそうな「ぼっち」な子のように想像する。それなのに、花の名をたくさん知る「いじめっ子」にリアリティーがあるのは、なぜか。